

社会的キャンピング試論

—都市形成とキャンピングの関係性からみる生活の更新—

建築学専攻
プロジェクトデザイン研究

MJ22077 鈴木 雄大
指導教員 山代 悟

序章 はじめに

0-1. 研究背景

人類はこれまで定住生活と遊動生活を繰り返すことで発展してきた。また、その過程では生存と豊かさを求める異なる場所で一時的な生活を送るキャンピングという営みを行うことで都市を更新してきた。しかし、現代社会では常に豊かさを追求する中で、資源枯渇の問題が浮上している。食料供給のための農地開発が熱帯雨林を破壊し、中緯度地域では砂漠化が進行し、2040年までには水資源が不足する可能性がある。これらの状況が続けば、地球の持続可能性が脅かされる可能性がある。

0-2. 研究目的

本研究はこれまでの都市開発で人類の進めている都市像と人類に必要な生活を比較することで現代都市の都市形成過程と都市像を再考する。

0-3. 研究方法

第1章ではキャンピングの定義を明らかにする。第2章ではキャンピングの変遷とともに時代毎の人類の都市の変遷を辿り現状の都市像と人類に必要な都市像について考える。第3章ではキャンピングという行為の都市と身体における効果について明らかにする。第4章では社会的キャンピングの側面から今後、人類が進むべき都市の方向性と更新手法について提示する。

0-4. 既往研究と本研究の位置づけ

既往研究では池谷和信氏や日本アフリカ学会会員の埜狼星氏が人類の発展過程における動態や民族間の関係性¹⁾²⁾を示していたが、本研究ではキャンピング的営みの発展とともに人類が進めている都市像と進むべき都市像について論じていく。

第1章 キャンピングの定義と分類

1-1. 一般的なキャンピングの定義

日本キャンプ協会では「キャンプは自然環境のもとで、必要最小限の装備で生活したり宿泊したり活動したりすること。」と定義される。さらにキャンプ(Camp)は古代ローマの練兵場、戦場そのものを指していたので、「野営」「テント生活」の他に「軍隊生活」「陣営」「同志」など幅広い意味を持つ言葉になってくる。ここでは一般に用いられる「キャンプ」と区別し広謀のキャンプを示す言葉として「キャンピング」という言葉を用いる。

1-2. 本研究におけるキャンピングの定義

1-1におけるキャンピングの定義を元に部分一致する行為を下記のようにまとめる。³⁾

Table with 2 columns: キャンピング行為, 説明. Lists various camping activities like 狩猟採集生活, 農耕牧畜, 遊牧生活, etc., with their descriptions.

表1 キャンピングの分類

以上のキャンピング行為を構成要素で分解し、キャンピングを「野外で一時的に行なう必要最低限の暮らし(営み)」と定義する。すなわち、分解すると「①野外 ②一時的 ③必要最低限 ④暮らし」の4つの軸で次章以降論じる。

1-4. キャンピングの分類・分析

1-2で挙げたキャンピングの行為を分類/分析していく。分類の方法として「フローチャート分類」「属性的分類」「定性マトリクス分析」「定量マトリクス分析」を行なった。フローチャート分類ではキャンピングの規模と目的・主体性によりキャンピングを抽象的概念で分類すると共に人類起源のキャンピングは「手段-能動-集団」の傾向があるのに対し、現代におけるキャンピングは「目的」「手段-受動」と古来のキャンピングとは異なる傾向があり、規模も個人集団異なり多様化が進んでいると考えられる。また、属性的分類では時代とともに属性にも相関関係があった。定量マトリクス分析では「狩猟採集」や「遊牧民」はキャンピングの要素が高く、現代の「二地域居住者」や「ノマドワーカー」は低いと考えられた。これは定量マトリクス分析においても明らかになった。古来のキャンピングほどシェルター自体の移動性があるのに対し、現代におけるキャンピング行為の中にはヒトのみ移動するという特徴も見られた。また場所性においても現代になるほど柔軟なものが現れていることが分かった。

第2章 人類起源からのキャンピング史

2-1. キャンピング史

キャンピングの歴史にはこれまで大きく7つの人口動態と共に都市を形成してきた。それらをキャンピングの性質と共に4つのフーズに分類して整理する。

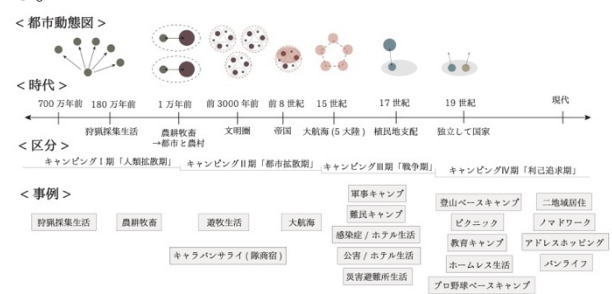


図1 キャンピングの変遷

2-1-1. 人類拡散期(180万年前)

今から180万年前、海面が低下し新たな陸地が生まれ離れていた大陸繋ぐ氷期と温暖になり砂漠に緑が生まれ移動のための道になる間氷期のそれぞれの時期に合わせて人類が世界中へ拡散していった時期を「人類拡散期」キャンピングと示す。獣を狩猟し植物を採集して個体間で分け与えお互いに支え合い生活をしていった。³⁾

2-1-2. 都市拡散期(1万年前~)

1万年前になると都市ではインフラや法律の整備、農村では食糧を育てる関係から「都市と農村」が形成され、ネットワークが複雑化した。やがて大きい集合体として文明化した。この時期から徐々にそれぞれ

の領地を拡大のため、世界中に帝国を広げていく動きが見られるようになる。一度人類が広がった状態から2度目の人類の世界的広がりを見せたこの時期を「都市拡散期」キャンピングとする。

2-1-3. 戦争期(紀元前8世紀～)

紀元前8世紀になると帝国が各地生まれると、より豊かさを求めて国の領土を拡大しようと国同士の戦いが起きる。東西の戦いはやがて大航海を経て世界5大陸への上陸へと繋がり「戦争期」キャンピングが行われるようになった。

2-1-4. 利己追求期(19世紀後半～現在)

現代においてキャンピングは個人的な利己要因から行われることが多い。この時代のキャンピングを「利己追求期」キャンピングとする。

2-2. 都市に変化をもたらす5つの視点

これまでの人類の歴史より都市に変化をもたらす要素として「人口動態」「気候変動」「経済」「テクノロジー」「思想・統治」という5つの視点がある。理由として「人口動態」は過疎的な場所において空き家等の形態により都市に変化をもたらし、人口集積地においては人類の働き場となるビル群を形成し都市をつくる。「気候変動」は自然災害により都市を破壊、公害対策としての都市計画により都市に変化をもたらす。「経済」は国内外の貿易により形成された市場により人類の格差を生み都市形態に変化をもたらす。「テクノロジー」は技術革新を生み都市でできることの可能性を広げる。「思想・統治」は人類の思想により都市形成され、時には戦争が勃発し都市を破壊し都市形態に変化をもたらす。⁵⁾

第3章 キャンピングの効果と再定義

3-1. キャンピングにおける2つの視点

キャンピングの外界への影響や効果を考えるとき、個人と都市の2つの視点におけるキャンピングの効果が考えられる。

3-2. 個人におけるキャンピング効果

キャンピングを身体スケールの視点で見ると教育効果があり大きく3つ挙げられる。1つ目は挑戦による「個人の成長に関わる効果」2つ目は他者との協働による「コミュニケーション能力の向上」3つ目は自然に触れ合うことによる「環境意識や自然認識力の向上」である。

3-3. 都市におけるキャンピング効果

3-3-1. 都市の更新手法としてのキャンピング

キャンピングは都市の更新には必要不可欠な行為である。災害や戦争により都市が破綻した時、すなわちインフラが破綻した際に生活基盤を失うことで一時的生活を余儀なくされキャンピングを行う。以上より「キャンピングと都市の関係性」を考える上では「キャンピングとインフラの関係性」を考えることが必要である。

3-3-2 自然インフラと人工インフラ

キャンピングは生活を支える都市基盤(インフラ)が薄れている所(壊れている所)に生じる。インフラには川等の自然にあるインフラ「(1)自然インフラ」と電気やガス、水道、通信、交通関係等のライフライン等の「(2)人工インフラ」に分類できる。自然インフラに人工要素を取り入れたグリーンインフラは人工インフラに含める。以上より、現代社会において人類は「人工インフラ」に依存して生活していると考えられる。

3-4. キャンピングの体系化

インフラの破綻パターンとその際に生じる人類の営みを考えると、帰宅難民やネカフェ生活が挙げられる。これは1-2で挙げたキャンピング行為以外の行為であるため再定義が必要である。以上を踏まえて、社会的キャンピングと称し「インフラと乖離した

際に生じる一時的で必要最低限の生活」と再定義する。また社会的キャンピング行為と人類の生活の関係性を体系化し図2に整理し今後の都市について考える。

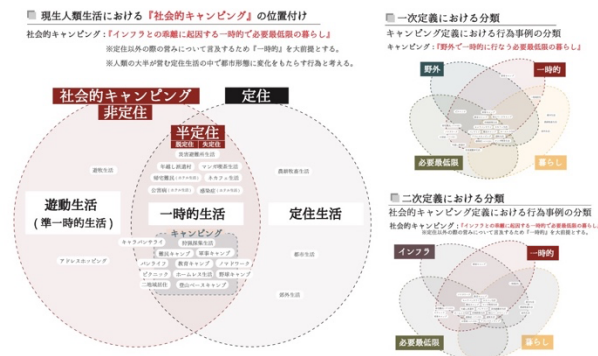


図2 社会的キャンピング行為と人類の生活の関係性

第4章 50年後の『東京』の都市像と更新手法

4-1. これまで発展してきた『東京』の都市像

近代都市の先進事例でもある東京における近代都市の弊害は大きく3つある。1つ目は「環境破壊」である。都市開発やスプロール用地等を通して精神的環境破壊が行われるほか、近代生活によるエネルギーの過剰消費による都市気候の悪化が課題とされる。2つ目は「都市災害」である。都市機能の要所が外部から破壊され都市インフラの脆弱性が課題とされる。3つ目は「都市計画の形骸化」である。計画された当初は機能や用途によるゾーニングとして都市計画が機能していたが現在においては整備手法だけが残ってしまっている。⁶⁾

4-2. 結論. 人類が進めていくべき『東京』の都市像と都市の更新手法

資源枯渇問題の緩和のため、内部持続的生活推進による大都市を中心とした二重構造の遠郊外の都市形成を進めていく必要があると考える。

都市の更新手法としては不動産と建築の間とされる半不動産の考え方を手法とする。

具体的には「インフラ搭載モビリティ」を用いた二地域居住である。空き家に必要最小限のインフラ機能を導入することにより、低コストで新しい住まいを手に入れることが可能となる。空き家改修にかかる費用は「設備費・改修工事費・家具費・その他」等であるが、インフラモビリティを導入することで「設備費・家具費」が浮くため、初期費用を低コストに抑えて低ハードルでの実現が可能となる。いわばバンライフの派生形である。これを推進するために「レンタルシェア」モビリティによる住宅再建手法を進める。また、推進動機としては教育目的の子育て世代をメインターゲットとして低コストで地方との二地域居住の実現という形で都市形態を変えていくことが望ましいと考える。

終章 おわりに

本研究をきっかけに社会的キャンピングを手法として地球環境の好転を目指し、現生人類の暮らしが維持できることを期待する。

参考文献

- 1) 狩猟採集民ムラブリと農耕民モンとの歴史的関係 -池谷和信-
- 2) コンゴ共和国北部における焼畑農耕民と狩猟採集民の相互関係の動態 -日本アフリカ学会会員 埴狼星-
- 3) レジリエンス人類史 -稲村哲也 山極 清水展 阿部健--
- 4) 地球と人類の46年史 地球誕生から生命の進化、ホモサピエンスの拡散、文明の発展まで -土屋健 宮崎正勝-
- 5) 2050年の世界 見えない世界の考え方 -ヘイミッシュ・マクレイ-
- 6) 現代都市のための9か条 近代都市の9つの欠陥 -西沢大良-